

子どもの成長につながる親の役割として、ありのままがいいかというと、そんなことはない。できれば、「いい親」を演じたい。

親は、子どもに何をすべきなのか。絵本の読み聞かせ、きちんと食事を与えること、言葉の教育、音楽、運動、躾などなど、人によって様々な意見があることだろう。では、最も大事なことは何か。それは、子どもが10歳になるまでは、見栄を張ってでも「いい親」を演じることである。

子どもは、いつも親を見て真似しようとしている。親の行動は子どもに影響し、成長を後押しすることもあれば、頭打ちにすることもある。だから、親は、子どもの前でありのままでいてはいけない。ありのままの自分で、子どもに立派な姿を見せられる大人は、そうはいないだろう。

少し無理してでも、いい親を演じてみるべきである。ちょっと背伸びをして頑張っているうちに、多くの人が本当にいい親になっていく。たとえしんどくとも、次の4つのことを心がけ、子どもに接してあげるとよい。

心がけ（1）親が子どもと一緒に楽しむ

とりわけ幼児教育においては、何事も子どもと一緒に取り組むべきである。それも、ただ取り組むのではなく、親が率先して楽しそうにやって見せることが大事である。子どもにだけやらせるのはよくない。

親がやることには何にでも興味をもち、自らチャレンジするのが子どもというものである。よく「子どもが興味をもてるよう導きましょう。そこから子どもの学びが始まります」などと言われる。そんなふうにもっていくにはどうすればいいのか。コツは実に単純である。親が子どもと一緒にあって楽しそうにやって見せるだけよい。

絵本を読む、料理をする、お出かけなど、声と匂いが届くところに親がいて、一緒に楽しむのである。それが一番大事なことである。ただし、間違っても子どもに無理強いすることだけは控えたい。いったん子どもが始めたことに口出しするのも無用である。強制や介入は興味を減じるだけで意味がなく、自主性も育たない。わるくすると、子どもが二度とやらないといった形で裏目に出てしまうこともある。むしろ親が楽しそうにやっているところを見せて良いお手本になるほうが、逡巡している子どもでも、やってみようかなと心が動くものである。

（次号に続く）